

35

近代整形外科学の先駆者，レオポルド・オリエ (1830-1900) の業績と生涯

小林 晶

福岡整形外科病院

レオポルド・オリエ (1830-1900) は整形外科領域では内軟骨腫症 (enchondromatosis, dyschondroplasia) の発見者として知られ、この疾患は彼の榮譽を讃え、オリエ病と冠名されている。このほか、骨軟骨の病理、生理についても膨大な業績を挙げ、近代整形外科学を発展させた偉大な先駆者である。しかし、その生涯、業績について、本邦では発表がほとんど無いのでここに報告する。

オリエは南フランス、アルデーシュ県のレ・ヴァン (les Vans) で1830年医家に生まれた。モンペリエ、リヨンの両大学に学び、1851年リヨンのオテル・ディウ (Hôtel-Dieu) のアンテルヌに合格し、以後終のすみかとした。

早くも1857年には骨損傷再生の実験を開始し、家兎の皮下や雄鶏の鶏冠に脛骨骨膜片を挿入し、3週間で骨の再生をみている。この結果骨関節の温存のためには、骨膜の存在がきわめて重要で、必須であることを示した。これは生理学コンクールでの優秀論文に選ばれた。このことが、後に骨軟骨・関節・骨膜の研究をさらに進める端緒となった。

1859年には画期的な「骨膜と骨移植による骨発生の実験的研究」を発表し、生理学賞を受賞した。因みにこの時のグランプリはルイ・パスツールに与えられている。

1750~1850年の整形外科治療の水準は次のような現状であった。すなわち、先天性疾患に対しては、ドイツのシュトローマイヤー (1804-1876) の皮下腱切り術を用いた変形治療を嚆矢として、外科的治療の黎明を迎えたが、装具・固定による矯正が主流を占めていた。X線発見以前には骨折・脱臼はよく誤診された。ここでも持続牽引、固定包帯、開放骨折の四肢切断が精一杯であった。漸くこの頃から麻酔法、制腐法が登場してきた。

オリエは普仏戦争 (1870-71) では、軍医として従軍した。実験で得た理論に基づき、骨損傷の治療に骨膜下の病巣部のみを切除し、骨膜を温存した。骨は再生し、切断数は著しく減少した。1863年講義で「整形外科学の現況」を述べ、その中で「整形外科学には三つの流れがある。即ち、実験、批判、本来の組織の温存である。合理的な整形外科学の基礎は生理学であり、真実に到達するのは実験によってである。三つの流れの一つにはできない」と言った。彼はこの信念を生涯貫いた。

1877年教授に就任してからも、実験と臨床の研究を持続し、前論文に続く「骨の再生、骨組織発生の実験的、臨床的研究」はナポレオンⅢから賞金を授与され、洛陽の紙価を高めた。このアイディアは、後年ロベール・ジュデ (1909-1980) により、デコルティカシオン (décortication, 1962) として改良され、骨折後の偽関節手術に応用されている。

また関節切除術も彼のテーマの一つである。切断以外にないと考えられる外傷、関節炎やその後遺症に対し、関節包と骨膜を連続させたまま温存し、内部の罹患部切除を行った。骨膜は感染に強く、温存により長期観察で骨・関節の再生をみている。オリエは1857年から合計824例の切除術を行った。これらの業績を「関節切除術提要」として3巻にまとめ、1885年~1892年に順次出版した。これは関節形成術の濫觴であり、現在は人工関節置換術が行われているが、今でも充分価値のある関節授動法である。

このほか、オリエは多数の手術法、器具などを発明し、使用されている。パリの有名なコシャン病院整形外科には彼の名前を冠した病棟がある。銅像もリヨンとレ・ヴァンに建立され、彼の業績を展示した博物館も2箇所各々存在する。

オリエはヨーロッパのほとんどの国の学会名誉会員に推挙され、仇敵であったベルリンのドイツ外科アカデミーには、有名な医師と並んで彼の肖像画が掲げられていた。しかし、1945年のベルリン攻防戦で消失している。オリエは1900年脳卒中で死亡した。葬儀は大学をはじめ各界の著名人が参列し、多くの市民も加わった。